津波災害に備えて

津波　一瞬にして襲いかかる津波から災害を防ぐためには、とにかく避難する以外はありません。

1．地震の大きさで自己判断しない。

過去には、揺れが大きくなくても津波がおきた例があります。
1896年の明治三陸地震津波では沿岸での震度は3程度でしたが大津波が押し寄せています。津波災害が予想される地域では、小さい揺れでも、揺れを感じなくても、避難を最優先にしましょう。

2．津波がないという俗説を信じない。

1983年の日本海中部地震では海岸付近にいた人々が津波にさらわれるなどの被害が多数発生しました。この地震が発生するまでは、日本海側には津波はない。などという俗説がもっともらしくいわれていた為、津波に対する住民の警戒心が不十分だったと指摘されています。根拠のない俗説に惑わされることなく、津波予報に耳を傾けましょう。

3．避難に車を使わない。

車による避難は渋滞を引き起こし、一刻を争う津波からの避難は危険が伴います。東日本大震災でも、車での避難で渋滞に巻き込まれ、津波で多数の人が命を落としてしまいました。その一方、一部の地域では、車での避難で助かった人もおりますが、基本的に徒歩で避難しましょう。

4.「遠く」よりも「高く」に。

津波が起こる可能性がある場合は、直ちに高台の方へ避難してください。すでに浸水が始まってしまった場合などは、近くの高いビルなどに逃げ込みましょう。

過去の教訓を生かして!

沖縄県の石垣島沖で1998年5月、マグニチュード7.6の地震が発生しました。気象庁は石垣島に津波警報を発令しましたが、島の住民のなかには避難するどころか、カメラを持って海岸沿いに集まり、「津波見物」を始める人がいました。幸い津波が小規模なものだったため、大惨事にはなりませんでしたが、その5年前には奥尻島で死者・行方不明者・重軽傷者200名以上の被害を出したばかりです。

津波警報等の種類・とるべき行動

津波警報等の種類	発表基準	津波の高さ予想の区分	発表される津波の高さ		津波警報等を見聞きした場合にとるべき行動
			数値での発表	定性的表現での発表	
大津波警報	予想される津波の高さが高いところで3mを超える場合	10m<高さ	10m超	巨大	陸域に津波が及び浸水するおそれがあるため、沿岸部や川沿いにいる人は、ただちに高台や避難ビルなど安全な場所へ避難する。 警報が解除されるまで安全な場所からはなれない。
		5m<高さ≦10m	10m		
		3m<高さ≦5m	5m		
津波警報	予想される津波の高さが高いところで1mを超え、3m以下の場合	1m<高さ≦3m	3m	高い	
津波注意報	予想される津波の高さが高いところで0.2m以上、1m以下の場合であって、津波による災害のおそれがある場合	0.2m≦高さ≦1m	1m	(表記なし)	陸域では避難の必要はない。海の中にいる人はただちに海から上がって、海岸から離れる。海水浴や磯釣りは危険なので行わない。 注意報が解除されるまで海に入ったり海岸に近付いたりしない。

津波から命を守るために

海岸近くに住んでいる方、海岸に出かける方に知ってほしい

3月11日14待46分、三陸沖を震源とするMw9.0(気象庁によるモーメントマグニチュード)の巨大地震が発生しました。この地震により太平洋沿岸を中心に高い津波を観測し、特に東北地方から関東地方の太平洋沿岸では大きな被害がありました。

気象庁はこの地震を「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」と命名しました。

沖縄県内でも、宮古平良で0.7m、那覇で0.6mの津波を観測しましたが人的な被害はありませんでした。

南西諸島を含む日本列島は多くの地震が発生しています。過去には1771年の明和の大津波で石垣島や宮古島で約1万2千名の人的被害がありました。

沖縄でも大きな地震が発生することを認識し、地震や津波への防災意識を高めましょう。

海岸で強い揺れやゆっくりとした揺れを感じたときは、津波警報などの発表を待たずにすぐに避難しましょう。また、避難先でも気象庁から発表される情報に注意しましょう。到達している津波が小さいからといって、もう安全だと判断するのは危険です。津波は何度も繰り返して来襲します。また、第一波よりもその後繰り返しやってくる波の方が高くなることがあります。

さらに、津波はたとえ0.2m程度であっても、普通の波と違って、水の壁が一気に押し寄せてくるもので、強大な破壊力があり、大人でも足をとられる場合がありますので、注意が必要です。

資料提供：沖縄気象台